

国立民族学博物館の創設者 梅棹忠夫先生

著者	須藤 健一
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	35
号	1
ページ	5-8
発行年	2010-11-15
URL	http://hdl.handle.net/10502/4481

国立民族学博物館の創設者 梅棹忠夫先生

国立民族学博物館長 須藤 健一

2010年7月3日、梅棹忠夫先生が亡くなりました。享年90歳。4月にお会いしたとき、『日本文明の黎明期』を書いて文明論を完結させると述べておられたのに。生涯「未知への探究」をつらぬかれた梅棹先生の美学に深甚なる敬意を表します。

梅棹先生は、学生時代、京都大学理学部で動物学を専攻する一方で、山歩きをし、ボナベ島や大興安嶺などで学術探検を行っていた。1944年の内モンゴル牧畜調査において、人間とその社会の不思議さ、面白さに関心を強め、動物学から人類学へと研究をシフトさせた。

梅棹先生の学問論の要は、「自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考える」、実証的でオリジナルな発想とその理論化を重視することであった。1955年には戦後わが国初の本格的な海外学術調査である京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊の一員としてアフガニスタンの奥地で調査を行った。13世紀に進出したモンゴル軍団の末裔でモンゴル語を話す集団をアフガニスタン西部の山中にたずねることが主な目的であった。翌年刊行した民族誌『モゴール族探検記』には、梅棹先生の学問に対する姿勢が如実にあらわれている。

その調査の帰路は、ドイツの研究者らとカーブルからパキスタンと北インドを横断し、カルクッタまでの車の旅であった。この「中洋」の旅で経験した見聞が、比較文明論の着想につながっていく。57年には、「文明の生態史観序説」（のち『文明の生態史観』1967年に所収）を発表し、「西欧文明と日本文明は平行進化を遂げた」という仮説を提唱した。生態学の遷移の法則に準拠したこの文明モデルは、学界だけでなく日本社会に大反響をよびおこした。

その後も、東南アジア、東アフリカそしてヨーロッパ各地で精力的に学術調査を実施している。それらの成果は、『東南アジア紀行』（1964年）と『サバンナの記録』（1965年）によって公にされ、さらに『狩猟と遊牧の世界—自然社会の進化』（1976年）において、動物の群れに人間集団が共生・結合したという遊牧起源論と牧畜の多起源論を展開した。この牧畜社会の人類史的位置づけは、世界に類を見ない独創的な

理論として高い評価を受けた。調査に基づく研究のほかにも、高度情報社会の到来を予測した「情報産業論」(1963年)や、手帳とカードを使って自分が発見した情報や発想を生かす技術をつづった『知的生産の技術』(1969年)を世に出している。

梅棹先生は、1974年6月に国立民族学博物館(みんぱく)を創設し、1993年3月まで初代館長としてみんぱくの拡充と発展に尽力された。国立の民族学博物館建設は、日本民族学会と日本考古学協会などの諸学会の1930年代半ばからの悲願であった。「みんぱく創設は渋沢敬三先生の遺言だ。わたしは創設までの長いリレーのなかの最終ランナーである」とみんぱく創設10周年記念講演で語っている。1960年代以降、日本の高度経済成長と国際化の進展、海外渡航の自由化と国民の異文化への関心の高まりなど、「天のとき」が到来した。そして国力の発揚と大阪での万国博覧会の開催という「地の利」と、日本民族学会の一致団結した国立民族学(研究)博物館の創設運動と創設後の全国的視野による人事構成などの「人の和」にめぐまれた。この好機に40年来の夢を実現させたのは梅棹先生の「知の敏腕」によるところが大きい。

みんぱくは、世界でも数少ない、博物館をもつ民族学の研究所で、国内外の研究者が集う大学共同利用機関として発足した。国立民族学博物館を大学ではなく、独立の大学共同利用機関として設置すること自体卓見であり、梅棹先生が京都大学で感じていた限界を超えるための設置形態であった。

研究組織面では講座制を排して大部門制とし、研究形態としては「各個研究」と「共同研究」を柱にすえた。各教員に独自の考えと自由な計画に基づく各個研究を保証し、同時に桑原武夫氏や今西錦司氏らと行ってきた京都大学人文科学研究所での共同研究を、みんぱくにおいて全国規模・世界規模に拡大したのである。教員は上記のふたつの研究の柱にそっていかに己を磨くべきかを訓練された。「研究の自由はあっても、研究しない自由はない。」これは梅棹先生が初期の研究部会議で放った名言である。校費のほかに、科学研究費補助金や外部資金を獲得すること、共同研究のリーダーたるべき資質を高めることやインターディシプリナリーな視野をもつことなどが求められた。さらに、開館(1977年11月)直後から、みんぱくの組織あげでの特別研究「日本文化の源流の比較研究」(1977～87年)と「日本文化における伝統と変容」(1982～90年)をスタートさせ、谷口財団の支援のもとに、国際シンポジウム「民族学部門」(1977～98年)と「文明学部門」(1983～98年)を毎年開催した。

『国立民族学博物館研究報告』(1976年)以降、『国立民族学博物館研究報告別冊』、『国立民族学博物館研究叢書』、欧文の *Senri Ethnological Studies* などの研究出版体制を整え、各個研究と共同研究の成果をみんぱくの学術雑誌として発表する場を確立し

た。その際、「評価からも批判からも絶縁されているようなタコソボ状況に陥ってはならない」との信念から、厳重な査読体制をつくりあげた。複数の人からの批判やコメントを真摯に受け止める仕組みであり、この体制は今日まで受け継がれている。

研究経営という発想もまた梅棹先生が日本の学术界、とりわけ人文社会科学の研究分野に注ぎ込んだ新たな潮流である。この発想から、研究機関が持続的に知的生産を重ねるために、研究成果に対する社会の関心を喚起し、それが研究者にフィードバックしていくという回路が構想された。また、研究成果を海外、とりわけ欧米の学界にむけて積極的に発信するためのしくみも構想された。具体的には、「知的生産の技術」の公共化を進める新しい展示技法、「情報産業論」を実践するコンピュータ民族学の開発、および国際シンポジウムの組織的、系統的な展開である。

梅棹先生は、博物館活動を市民教育の一環と位置づけて重視し、世界の諸民族文化を9つの地域とふたつの通文化のコーナーに分けて展示場を構成した。そして、入館者がモノにふれ、モノとモノをつないで異文化を感じ、ビデオテークの映像で世界の人びとの生活や文化を理解するなど新しいコンセプトによる構造展示を実現した。開館時から現在までの入館者数は937万人（2010年9月末現在）にのぼり、文字通り、人びとにとっての「知的享楽の場」となっている。

情報論に関して、梅棹先生はみんぱくを世界の民族と文化の情報の集積センターと位置づけ、収集される標本資料や文献図書資料をはじめ、膨大な研究資料を整理、処理するための大型コンピュータをいち早く導入した。そして、みんぱくは高度情報化社会を先取りし、種々の学術情報を処理・分析する最先端の「博情報館」となったのである。

さらに、民族学と文明学の国際シンポジウムを10数年にわたって主宰・組織して、斬新な人類学のテーマを議論し、また比較文明学の枠組みと理論を構築したことは、海外の学界に日本の人文社会系の学問分野の存在感を強烈に示すことになった。とりわけ、「人間・装置・制度系」という梅棹文明学は、欧米をはじめとする諸外国に紹介され、国際的にも高い評価を受けている。

梅棹研究経営における生産ノルマの厳しさは、今でも強烈な記憶として残っている。研究活動や博物館運営が落ち着きはじめた創設10年後、「ちょっとだれているという感じがする。もういっぺん創業時代のこと、何をめざし、どういう戦略でやってきたのか、皆さん思い起こしてください」と教員に檄を飛ばした。創設15年目には教員の着任以降の給料を学術論文の頁で割って業績を評価するという荒わさを断行した。この業績評価は、「安定退職の法則」を排除するための警鐘であった。

梅棹先生は、国内外の学界の第一線で認知される研究とそのため研究経営の実践という理念によって、研究の水準を高め、みんぱくを国際社会に通用する文化人類学・民族学の学際的研究センターに育ててくださった。現在、内外から年間 1000 名もの研究者が客員教員、共同研究員や外来研究員としてみんぱくを活用している。

梅棹先生は 1986 年に失明されたが、それまでの独創的で広範な研究活動の集大成を『梅棹忠夫著作集』（全 22 巻、別館 1 巻）として刊行し、1994 年に完結させた。それ以後も、『近代世界における日本文明』（2000 年）、『山をたのしむ』（2008 年）などを著わし、その学術的探求心と知的生産の営みが衰えることはなかった。梅棹先生は、これらの功績により、フランスの教育功労賞コマンドゥル章（1988 年）と紫綬褒章（1988 年）を授与され、ついで文化功労者（1991 年）として表彰され、1994 年には文化勲章の榮譽を受けられた。

梅棹先生は、学問を愛し、みんぱくを愛された。「京都大学にいたら一生かかってひとつの人類学講座をつくれれば御の字。みんぱくでわしは 21 講座 63 名の教授、助教授、助手の研究所をつくりあげた」と誇らしげに笑っておられたのが思い出される。そして、おすまいも京都から千里に移し、「梅棹のみんぱく」が建つこの千里の地を「知の拠点」にしたのである。

21 世紀初頭の閉塞した社会的、経済的、そして学問的状况の中で、知のもつ意味があらためて問い直されている。梅棹文明学を受け継ぎ、さらに発展させて、次の世代に伝えていくことが、あとを受け継ぐ私たちのつとめであるとの思いを新たにす

る。

千里の地でみんぱくの真の「ご先祖さま」になられた梅棹先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。